

第二章 空蟬の物語 手紙を贈る

[第一段 昔の小君と紀伊守]

石山より出でたまふ御迎へに右衛門佐参りてぞ、*まかり過ぎしかしこまりなど申す(光君が石山寺から御帰りになる日の御迎へに右衛門佐が参上しては、逢坂関で御前を去ってしまったお詫びなどを申します)。 *注に<『新大系』は「先日(逢坂の関で、源氏のお供もせず)通り過ぎたことのお詫び」と注す。>とある。それ以外に無いかと思いながらも、逢坂関の場面があつと言う間に終了してしまっていた事と、石山寺の描写がない事と、こういう省略の仕方が出来てしまう事、に驚く。

昔、童にて(昔、右衛門佐が子供の頃)、いとむつまじう(とても身近で)らうたきものにしたまひしかば(殿が可愛がって居らしたので)、*かうぶりなど得しまで(爵位を得るまで)、この御徳に隠れたりしを(光君の御蔭を被ったのに)、おぼえぬ世の騒ぎありしころ(思わぬ失権の時に)、ものの聞こえに憚りて(在らぬ疑いを恐れて)、常陸に下りしをぞ(常陸に下ってしまったのを)、すこし心置きて年ごろは思しけれど(殿は少しこだわってここ数年は御思いだったが)、色にも出だしたまはず(そんな素振りは御見せにならず)、昔のやうにこそあらねど(昔のようでこそは無いものの)、なほ親しき家人のうちには数へたまひけり(まだ親しい家来の内には入れていらっしやいました)。 *「冠得し(かうぶりえし)」で<く従五位下に叙せられること。叙爵(じょしゃく)。>と大辞泉にある。六位では清涼殿の控えに殿上の資格がなかったようで、貴族の仲間入りくらいの意味だろうか。ただ此处までは既述の経緯で、此处からやっと少し右衛門佐の足取りが語られるが、それでも関所での遣り取りや描写にこの時点での人間関係の説明が不足していて、此处で是を語るなら其処を少しは埋める工夫も欲しいし、構成も内容も下手クソに思えてしょうがない。とにかく分かり難い。

紀伊守と言ひしも(きいのかみといひしも)、今は*河内守(かうちのかみ)にぞなりにける。 *注に<紀伊国は上国、河内国は大国。>とある。先ずは出世である。

その弟の*右近将監(うこんのじょう)解けて御供に下りしをぞ(三年前の政変で解任され光君の御供で須磨に下った者を)、とりわきて*なし出でたまひければ(光君はとりわけ引き立てなされたので)、それにぞ誰も思ひ知りて(その忠誠心の重さを誰もが思い知って)、「などてすこしも(どうしてわずかでも)、世に従ふ心をつかひけむ(世に迎合しようとしてしまったのだろう)」など、思ひ出でける(つい思うのでした)。 *「右近将監」は近衛府の三等官で位は正六位上との事。 *「為し出づ(出世させる)」とあるが、具体的な官位は示されていない。

[第二段 空蟬へ手紙を贈る]

佐召し寄せて(すけめしよせて、光君は右衛門佐を近くに御呼びになって)、御消息あり(おんせうそこあり、姉上への御手紙を遣わせなさいました)。

「今は思し忘れぬべきことを(今ではお忘れになりそうな姉への思いを)、心長くもおはするかな(いつまでも御持ちなのだな)」と思ひあたり(と右衛門佐は思っていました)。

「一日は(ひとひは、先日は逢坂関を越え逢って)、契り知られしを(縁の深さを知らされましたが)、さは思し知りけむや(そうは御思いになりませんか)。

わくらばに行き逢ふ道を頼みしも、なほかひなしや潮ならぬ海 (和歌 16 - 2)

行き逢いたいと頼んでも、淡海近く逢わぬ身の関 (意識 16 - 2)

*注に<源氏から空蝉への贈歌。「逢ふ道」に「近江路」、「効」に「貝」を掛ける。「潮ならぬ海」だから「海布松(見る目)」が生えてなく、「貝(効)」がない、という。>とある。また、「わくらばに」は<まれに、偶然に>とあるが、「わくらば(病葉)」という別の語は<病気や虫のために変色した葉。特に、夏の青葉の中にまじって、赤や黄色に色づいている葉。>とあり、夏の季語とされているが、紅葉の散る関の情景に重ねているのは間違いない。「わくらばにゆきあふみちをたのみしも(紅葉の散り落ちる逢坂の関道に回り逢える近江路を期待しても)なほかひなしやしほならぬうみ(潮海ではないから海布松がないので見る目の甲斐も無いという貝が無い淡海に向かうのが逢坂の関だろうか)」という技巧だらけの歌。

*関守の、さもうらやましく(関守さながらに貴女を守る常陸介が羨ましくて)、めざましかりしかな(目障りに思えたものです) *注に<「逢坂の関」の縁語で「関守」という。恋路を妨げる空蝉の夫常陸介という気持ち。>とある。

とあり(という御手紙でした)。

「年ごろのとだえも、うひうひしくなりにけれど(長年の音沙汰なしに気まずくもなりますが)、心にはいつとなく、ただ今の心地する*ならひになむ(この手紙は思い出話では無く今の気持ちをお伝えする物です)。好き好きしう、いとど憎まれむや(何を今さら浮かれた事をと一層うるさく御思いになるでしょうか) *「ならひ(慣らひ、習ひ)」は<世の決まり、習慣>という意味の他に<秘伝を授ける、秘密を口伝で教える>という使い方があると古語辞典にある。

とて、賜へれば(光君が手紙をお渡しになったので)、かたじけなくて持て行きて(右衛門佐は勿体無いことと姉の所へ持って行って)、

「なほ、聞こえたまへ(今度こそ、良い返事を為さってください)。昔にはすこし思しのくことあらむと思ひたまふるに(殿におかれては、昔よりは少し疎んじて御出でかと存じていましたが)、同じやうなる御心のなつかしさを(変わらぬ御心の御優しさとは)、いとどありがたき(何と有難い事か)。すさびごとぞ用なきことと思へど(他人の恋路に口出しは無用かと思いますが)、えこそ*すくよかに聞こえ返さね(決して頑なな御返事は為さませぬように)。女にては、負けきこえたまへらむに、*罪ゆるされぬべし(女の身で情に負けて色よい返事を申しなさっても不義の罪は許されましよう)」など言ふ(などと言います)。 *「すくよか」は今の「すこやか(健やか)」のように<すくすくと丈夫に育つ>という意味の他に、「疎む(すくむ、こわばる、かたくなになる)」「よ(ように)」「来(く、なる)」という連用の形容形でも有る、との事。 *注に<『完訳』は「女の身としては、相手の説得に負けて応答したところで誰の避難も受けまい。「罪」は夫以外の男に通じる罪。それを楽観的に言う。不義の仲を取り持とうとするのは、権勢家への追従心によろう」と注す。右衛門佐の成長が感じられる。>とある。成長かどうかは分から

ないが、権威志向は間違いない。不義が女だから許されることなど有り得ない。相手が権力者だから誰も文句が言えないので、むしろ右衛門佐の浅ましさを感じる。非難ではなく、人物像として。

今は、ましていと恥づかしう(姉君は今さら一層気恥づかしく)、よろづのこと、うひうひしき心地すれど(何もかも気まづく思えたが)、めづらしきにや(今の光君の輝かしさが嬉しくて)、え忍ばれざりけむ(とても辛抱堪らなかったようで)、

「逢坂の関やいかなる関なれば、しげき嘆きの仲を分くらむ (和歌 16 - 3)

「山道深い逢坂の関がどうしても邪魔をする (意識 16 - 3)

*注にく空蟬の返歌。歌中の「近江路」「潮ならぬ海」は用いず、歌に添えた「関守」の語句を受けて、「逢坂の関」に「(人に)逢ふ」の意を掛け、また「嘆き」に「(投げ)木」を響かす。「仲を分くらむ」と、源氏の意を迎えた歌を返す。>とある。「投げ木」は関の山道を掛けるのだろうか、「しげきなげき」の韻が山道を偲ばせるのは分かるが、文脈上の意味はあまり良く分からない。が、しかしもっと分からないのは歌の主旨自体だ。是ではまるで、常陸介を悪者に見立てる事で、二人の気持ちに通じている事を傍証して、貴方の気持ちは分かっていますと受諾表明した、という構成になる。勿論、歌は言葉遊びだから気分が共感できれば楽しい、と言う事は在るにしても、原理から逸れては興醒めかと思う。私が思う原理とは、こうだ。帯木は受領の女である。その受領の女が、帝の血を引く光君を以ってしても、思うようにならない。それも帯木は、身分の低い者を弄ぶなという強がりだけで拒否していたのではない。分を弁えて貞淑を守る帯木に、下級らしからぬ高貴な倫理観を受領層が身に付け始めていた時代性を実感して、光君は惹かれ続けた、のだろうと思う。帯木が元々は高貴な、帯木巻では衛門府長官の中納言と語られていた、家柄の出ながら、台頭する受領家に下った、ということに光君がこだわる意味は、正にその時代性の具現に他ならない。同じ様に受領に下った大貳の北の方が、高貴さを捨てた事との対比構造は、蓬生巻に引き続いて語られているようにも思う。光君は王権復古を込めて帯木籠絡を仕掛けるが、時代の流れに拒まれ続ける。だから光君は挑み続ける。しかし一方では、現実には王権の豊かさは彼等受領などの新規開拓者によって支えられている事を百も承知の内大臣は、挑み続ける手応えにこそ実権の安堵を覚えざるを得ない。だから、簡単に常陸介を悪者にして排除したのでは全体の構図が崩れて、結局は帯木は見えなくなる、筈だ。マ、それを踏まえた上でのシーソー・ゲームの一局面として、幾らか王政復古側に振れただけ、という事ではあるのだろう。

「夢のやうになむ」と聞こえたり(とお返事申し上げました)。

あはれもつらさも(心を震わせた事に於いても思い悩んだ事に於いても)、忘れぬふしと(忘れられない自分の青春だと)思し置かれたる人なれば(光君が御思い置きなさっていた人なので)、折々は、なほ、のたまひ動かしけり(時々は更に御手紙を送って帯木を揺らしなさいました)。